

「両者の間の平衡は 強者の意思に代わって維持せられる」

『中国返還後の香港——「小さな冷戦」と一国二制度の展開』を読んで

倉田徹著／名古屋大学出版会／2009年11月／408頁／5985円



樋泉克夫

中国の立場、歴史観に立てば「中国回帰」となる九七年七月の香港返還から一三年が過ぎ、香港に関しての著作の出版も一時に較べめつきり少なくなってきた。いや、ほぼ絶えたというべきか。そんな出版状況下において、本書は久々に現れた待望の本格的な研究書といえるだろう。

思えば香港返還を前後して、料理や映画はもちろんのこと飲茶や中国伝統スィーツの紹介といった一種のゴ陽気ともいえる香港への関心から執筆された著作にはじまって、返還は「香港の死を招く」「香港の民主主義の火を消すな」といった悲憤慷慨の主張を満載したもので、我が国でも香港に関する数多の著作が出版された。もちろん、そのなかには本書のような研究書も含まれる。数えたこともないので、いったい、どれほどの点数が出版されたかは知りようもない。だが、ともかくも、あの当時、日本人はかくも強い関心を香港に抱いていたのかと呆れもし、感心もした。これほどまでにアジアの問題に強い関心を抱いてい

たのかと、ある面では心強く思ったものだが、あれは後の韓流ブームに似た日本人特有の移ろい易い一種の流行現象だったということかもしれない。

あの時から今日まで出版された香港に関する数多の著作の内容、いやそれら著作の書き手の香港に向き合う姿勢をみても、香港に対して一種の「強い思い入れ」を行間に滲ませているかどうかで大別できるように思える。香港は一時の興味、たまたま遭遇した手慰みの相手、単なる研究の対象でしかない。あるいは断固として香港でなければならぬ、という二つの異なった姿勢だ。後者の場合、その主義主張とは関係なく、香港を興味や研究の対象と看做す以前に、すでになんらかの形で香港を「体験」し、生活実感として香港を捉えているということだ。もちろん本書の著者は、このタイプといえるだろう。それを、この分厚い研究書の抑制の効いた文体で綴られた論文の行間からも十二分に読み取ることができるのだ。

「あとがき」によれば「筆者が香港研究を開始したのは大学三年生のときであるが、中国・香港への関心は、それ以前からの教育によつて培われてきたものである」とのことだが、それに続いて「そして、筆者の香港との出会いを最初に設定してくれたのは父・實である。香港の航空会社に勤務する父に連れられ、幼児期に最初の訪れた外国が香港であった」と綴る。やはり著者は、もの心つく以前に香港を体験していたのだ。さらに著者は「そして、香港返還交渉の決着後に、父の会社は返還後も五〇年は大丈夫と教えてもらったことが、筆者にとって『一国二制度』の最初の印象である。香港研究は自分で選び取った道と思いつつも、結局のところ父の薫陶に筆者の人生は多くのものを負っていると言わざるを得ない」と続ける。

やはり想像に違わず、著者にとつての香港は、研究対象であると同時に人生の一部になっていた。やや大袈裟に表現するならば、香港は著者の体内に「血肉化」されていたということだろう。ここで、

評者にとつても香港は人生の一部だなどと口にする、なにやら著者に同類に扱われないでくれと叱責される恐れは多分にあると思う。

本書を読み終わった率直な感想だが、有体にいつて、いつしか著者は香港を研究の対象として客観視するようになり、評者は相変わらず香港に淫し恋しているといったところだろうか。

思えば評者が体験した香港は一九七〇年秋からの五年ほど。最も激しかった時期を過ぎたとはいえ大陸は文化大革命の荒波に揺れ、文革過激派の上をいくような過激な行動で香港社会を揺さぶった六七年の「香港暴動」の余波が完全に鎮まったというわけではなく、香港もまた物情騒然としていた時期でもあった。評者が香港在住当初に住んだ下宿の家主を頼って逃亡してきた元紅衛兵との付き合いも重ねたし、また海岸に漂着した逃亡失敗者や武闘犠牲者の無残な死体を目にするのではないわけではなかった。米中ピンポン外交に続くニクソン大統領訪中の衝撃も、田中首相による日中国交正常

化への動きも、香港での体験だ。

街頭に立ちつくし、電気屋のショーウインドーに置かれたテレビでニクソン大統領訪中に見入っていた市民の真剣な眼差しは、いまでも忘れられない。大国の間で展開される国際政治の千変万化するゲームの行方は直接・間接に香港に波及し、そうであればこそ彼らの日常生活を左右するのだから、米中関係が本当に雪解けに向かっているのか、それとも一時の椿事か、ニクソン対毛沢東、キッシンジャー対周恩来の一挙手一投足が気になったとしても、それは当り前のことだった。そういえば、日頃から激烈な共産党批判を繰り返していた友人の一人は、ニクソン大統領の閣兵を受ける人民解放軍の背丈の高い儀仗兵を指差し、解放軍は素晴らしいと絶賛していたことを思い出す。香港の人々が持つ、大陸に対する複雑に絡む愛憎模様を、まざまざと見せられた。おそらく彼らの内心の複雑な感情もまた、返還の過程で大いに揺れ動いたことだろう。

その当時、自らが住む地が「英国植民

地」であることに冷めた怒りを持っていた友人は少なくなかった。だが、だからといって彼らが香港が英国の植民地を脱するなどと、ましてや特別行政区としての地位をもつて中華人民共和国の一部を形成するなどと夢想だにできなかったはずだ。なにせ彼らの多くは、共産党政権から逃れ暫しの安住の地を求めて香港にやってきた難民であり、その家族だったからだ。もちろん先祖伝来、新界で農業を営み、四方の角に望楼を備えた防護壁で囲まれた集合住宅に住む客家の友人もいた。客家の友人の一人は、その後、オーストラリアに移り、上海で仕事をし、いまアメリカだ。

彼らは返還に関する中英交渉にも、ましてや返還正式決定後から九七年七月一日までのいわゆる「過渡期」にも表面的には強い関心を示すこともなかったが、交渉が進んでいく過程で、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに住む一族を頼って早々と移住していった者もいれば、一貫して香港での生活を続ける者もいた。移住先に住み着い

た者もいれば、最初から計画していたのでもめるかのように移住先のパスポートを手にUターンし、香港で返還前と同じ営みを続ける者もいる。もちろんビジネスの道に進んだ友人にとつての商戦の主戦場は大陸の広大な市場だ。

改めて彼らに問い質したこともないし、そうしようとも思わないが、率直にいつて彼らにとつての返還は、香港の為政者が英国政府から中華人民共和国政府に、ロンドンから北京に代わった、ただそれだけということではなかったらうか。

この本は、中英両政府による返還交渉過程で当時の北京の最高実力者であり、「死ぬまでに一回でもいいから祖国に戻った香港の土を踏みたい」と願っていたとも伝えられた鄧小平が「発明」したとされる「一国両制」（著者は本書で一貫して「一国二制度」とする）が、香港の現実の中でどのように運用され、香港経営に生かされ、北京（中央政府）と香港（地方政府）の関係を調整し、香

港住民の生活を支えようとしているのかを、「利用可能な公式の資料は非常に乏しい」と嘆きながらも、能うかぎりの努力を払って集めた客観的で公正な資料を基に論じている。つまり冒頭に掲げられた著者のことばによれば、「本書の主題は、一九九七年の中国への返還以来、香港で行われている『一国二制度』方式による統治の解説である」ということに尽きようか。

今後の香港の動向を「解説」する意味でも重要であり、それゆえに本書で著者が強い関心を示している「中港関係の研究」についても、著者は「中央政府内部の対香港政策決定はほとんど不明瞭であり、「ましてや中央政府内部の香港政策をめぐる議論の内容を外部の者が知る余地はほとんどない」と述べる。だから「主として香港側で利用可能な資料に依拠せざるを得ない」と研究上の制約を率直に口にしながらも、かつて興味本位のニセモノと同義語として扱われがちであった「香港情報」にも一定の冷静な眼を向け理解を示し、「憶測に基づく分析

記事や真偽が曖昧な報道記事は参考にはしつとも、証拠として採用することは極力回避する一方、確度の高い報道から知り得ることのできる事実を大量に蒐集することによって、マクロな議論を構築することに努める」としている。

要するに本書は「確度の高い報道から知り得ることのできる事実を大量に蒐集することによって」「構築」された「マクロな議論」を基盤に、客観・公正な公刊資料に著者流の精緻な分析を加えた結果としてえられた『「一国二制度」方式』の「解説」ということになるだろう。

以下、目次を挙げ、この本の概要をみておく。

序章 「小さな冷戦」としての中港関係

と「一国二制度」

第1章 「港人治港」の実態

——香港政治エリートに対する中央

政府の統制力

第2章 民主化問題

——「デモクラシー」から「中国の

特色ある民主」へ

第3章 「防壁」の中の自由

——香港メディアに見る「擬似国

境」の政治性

第4章 「繁栄と安定」

——中港関係の政治経済学

第5章 「愛国者論争」

——香港人意識と愛国心

終章 「一国二制度」の中港関係

このように目次を追ってみると、著者が冒頭に掲げた「一九九七年の中国への返還以来、香港で行われている『一国二制度』方式による統治の解説である」との本書の主題が、過不足なく論じられていることが判る。

おそらく、この本は現時点で我々が知ることでできる『「一国二制度」方式』についての最も具体的で精緻な研究といえるだろう。であればこそ、鄧小平が一九八四年六月二二、二三日の両日にわたって香港の工商訪京団と返還交渉過程における香港側のキーマンの一人である鍾士元を前に、「一個の国家、兩種の制度」という方法を用いることを提示す

ることで、香港と台湾の問題を解決する〔鄧小平論「一国両制」三聯書店(香港)有限公司、二〇〇〇四年〕と言及しているように、将来の兩岸統一という問題を見据える上で大いに有益な示唆を与えてくれることになるだろう。

以下、評者が抱いた愚問を示しておくたい。

まず著者は「しかし実際には、返還後に、パットン統治期のような中央政府と香港政府の対立や、中央政府の頻繁な香港内政への介入はみられなかった」とし、さらに「返還の際、香港政庁の主要高官は、基本法の規定により(中略)全員が留任し、その他の公務員も職に留まることが認められた。即ち、返還前に中国政府と激しい対立関係にあった香港政庁は、(中略)その長をパットンから董建華に交替させるのみで、ほぼそのまま香港政庁として存続した。それにもかかわらず、香港政庁は、中央政府に十分に信任され、完全に支持される香港政府へと一夜のうちに変わったのである」と一

種の「驚き」を込めて述べる。

だが、驚くには当たらない。評者は返還を挟んだ三年弱ほどの間、ほぼ毎月香港を訪れ返還へ向けての街の変容を綴ったことがあるが(『月刊香港』一号から二九号『Foreigner』一九九五年七月号から一九九七年一月号、新潮社)、当時の状況を思い起こせば、表面的には「中央政府に十分に信任され、完全に支持される香港政府へと一夜のうちに変わった」とみえるのであろうが、じつは「一夜のうちに変わった」のではなく、「過渡期」を通じ香港の政・官・経済界が「中央政府に十分に信任され、完全に支持される香港政府」へと長い時間をかけ、様々な工夫を凝らし、一般住民もまたそれなりの心構えをしてきたということだ。

誤解を恐れずに表現するなら中国にせよイギリスにせよ、さらにいうなら香港の企業家にせよ、香港を「金の卵を産む鶏」と看做していたことは同じ。であればこそ返還交渉とは繁栄する香港を、中国は「居抜き」で引き取ろうとし、一方

のイギリスは高値で「売り抜く」べく画策した別の表現であり、両国政府の思惑の隔たりを如何に埋めるか、いわば「双赢(win-win)」の関係を如何に築くかが交渉の最大の眼目ではなかったか。もちろん香港の企業家にとっても、香港経済の繁栄維持は至上命題であったはずだ。

著者は第1章で香港政治エリートと北京の中央政府の関係から「港人治港」を分析し、第2章では「過渡期」にパットン総督が返還後にもイギリスの影響力を残そうと仕掛けたと思われる民主化に対する北京の反発と最終的には「中央政府の主導権掌握」によって限定された「中国の特色ある民主」が行われることとなった過程を詳細に論じている。だが「港人治港」にせよ「中国の特色ある民主」にせよ、返還までの「過渡期」で、いや返還交渉の過程においてもすでに北京主導が進まざるを得ないという方向は定まっていたのではないか。つまり香港をめぐっての政治力学関係が、長谷川如是閑が「英国は千八百六十年の条約でこの九竜と香港とを取って更に九十八

年に北緯二十一度九分の線から北を東経百十三度五十二分より百十四度三十分に至る間、真四角に分け取ったがその手段は余り真四角ではなかった。何しる衡の一方が飛び上がって一方が地に着いている始末だから、両者の間の平衡は強者の意思に代わって維持せられる（「倫敦！倫敦？」岩波文庫一九九六年）と二〇世紀初頭に看做した情況が、二〇世紀末には反転してしまっていた以上、やはり「港人治港」にせよ「民主化問題」にせよ「両者の間の平衡は強者の意思に代わって維持せられる」のは当然のことだったように思えて仕方がない。

いにかえるなら返還交渉、交渉成立から返還までの一二年に及ぶ前後の「過渡期」、さらには初代長官董建華の時代、辞任という形で董の失脚（解任？）、そして曾蔭権新長官選出から現在までをざっと振り返ってみると、北京とロンドン、北京と香港という二組の「両者の間の平衡は強者の意思に代わって維持せられ」てきたということだろう。

返還交渉の過程で北京とロンドン「の

間の平衡は完全に崩れ、もはや「港人治港」は望むべくもなくなつた。ロンドンという後ろ盾を失つた以上、「過渡期」における北京と香港「の間の平衡は」、北京に委ねるしかない。だが北京にしても自らが直接的に香港の統治に乗り出すのは、香港の内情からして摩擦が多いだろうし、「香港の繁栄の維持」という国際的な約束を反故にしかねない。そこで「京人治港」でも「軍人治港」でもなく、いわば「京人治港」と「商人治港」の折衷案とでもいうべき現在の統治形態を採用したのではなかるうか。「穏な過渡期を実現し安定した繁栄を保持するための意見や要求をもとめるため」に設けられた「港事顧問」にしても、香港を代表する多くの企業家のみならず、タイ、インドネシア、マレーシアを代表する華人企業家やその親族までが選ばれているだけではなく、返還作業に関連する様々なポスト、さらには返還から今日までの特別行政区政府のメンバーをみて、それが「読解」できるのだ。

香港の場合、純然たる政治家という存

在は認めがたい。著者が言及している唐英年のみならず、吳光正、李国宝、陳有慶、陳智思、安子介、曾憲梓、田北俊、劉皇發などに典型的に見られるが、彼らは大企業を経営する経済人であると同時に政治家なのだ。いわば経政家とも表現できそうな存在なのである。であればこそ、彼らの行動を「読解」すること、**「一国二制度」方式**を読み解く大きな力ではなかるうか。

著者は「返還後の『一国二制度』下の中港関係の展開を、『冷戦が生んだ分裂国家の統一』という特徴に注目して分析することにより、理解することが可能となると考える」立場から、「読解」を試みている。注目すべき視点であり多くを学ばせてもらった。

著者は「中港関係」という用語は、本来奇妙な単語であり、「特に中央政府から見た場合、政治的にも正確ではない用語である」とする。その奇妙で正確ではない用語を使って「読解」せざるを得ないのも奇妙なことだが、こうは考えられないだろうか。

返還までの「中港関係」の「中」は北京であり「港」はロンドンに支えられた香港政府であり、返還後の「中」は北京の中央政府であり、「港」は特別行政区政府という香港の地方政府、と。返還交渉から現在まで一貫して捉えてきた中港関係だが、返還を境に指し示す内容が変わったと考えれば、「本来奇妙」でも「政治的にも正確ではない用語」でもなからう。これは中澳関係にも、ましてや中台兩岸関係という用語にもかわつてくるが、中と澳にせよ、中と台にせよ確かに「政治的にも正確ではない」。だが「本来奇妙」で「政治的にも正確ではない」からうが、紆余曲折はあるものの、その用語によって双方が「双赢(双赢)」な関係を求めて現実政治を動かしているという点は忘れてはならないように思える。

最後に駄弁を一言。

返還以前から現在まで一貫して香港を冷静に見ることのできない評者からすれば、政治権力の担い手が大きく交代する

過程で香港の人々(ということは漢人)がどのような振る舞いをみせたかを、見せてもらったよう思う。いい古された表現だが、やはり「上に政策あれば、下に対策あり」だった。こんな思いを抱きつつ、中台兩岸関係も、今後とも注視していきたいものだ。

本書の最後は「このように中港関係についてかつて提起された様々な問題は、返還直前の中港対立を前提とした分析視角ではなく、中港融合を前提とした分析視角に基づいて新たに問い直し、中国政治の重要な一部分として研究を行うことが、新たに求められているのである」と結ばれている。

本書を読んだ誰もが、中港対立から中港融合へ向けての中港双方が繰り出す「知恵」に考えさせられるであろうし、著者の分析、いや「読解」の鋭さに脱帽しつつ、次なる研究の成果を期待するはずだ。評者にしても、その思いはもちろん同じである。